
ニューデリーからマナリへ

隊荷と共にトラックの旅

増子カ

ニューデリーを飛つ

残暑なのか、デリーでは常なのか、夜明けから汗がしみ出るような寝苦しい朝を、カラスの鳴き声で目をさました。もうユースホステルの前の広場では、早朝より十五人位、真っすぐなカマで草刈りをしていた。とてもインドの首都に居るといふ気になれない程、のどかな所である。コンノートプレスに通じる道路は、乗用車、二階バス、スクーター、タクシー、三輪スクーター、自転車とても混雑しているが、走っている車が全部古いせいなのかのどこかに見えてしまう。午前中に東京銀行に行って、ドルを換金してもらい、チャーターしたトラックをユースホステルで待った。

来た来た。とても大きく日本のトラックに相当すれば十トン積み位のボンネット型であった。運転席の回りはなにかと飾りたててあり、いたる所にヒンズー教に關係ある模様が描かれていた。いかにも車を大切にしているかのようであった。広い荷台の前の方に隊荷を積み、隊員二名で出発。途中Y M C Aホテルでの滋賀隊の隊荷と隊員二名と合流し、オールドデリーにある運送会社の事務所に寄り先を急いだ。運転手はこの車はニューデリーの車でないから午後二時迄に郊外に出なければならぬとしきりに言っていた。この理由はよく解せないが、そういう規則があるらしい。もう一つの問題点はチャンディーガールで車を持ち換えるとの事であった。それは現在使用している車はたぶんウツタルプラディシュに登録してある車らしく、ヒマチャルプラディシュに入るにはかなり高額な通行税がとられるとの話であった。多少の不安はあったが、信用の出来る人を通してのチャーターであったので安心していった。午後二時迄出るといった割には、ゆっくりオールドデリーの町を走っていた。出発前からトラックの運ちゃんにはガラが悪く、酒飲み運転をするという話を聞かされていたが、実際とても安全かつ力強い運転ぶりを披露してくれて胸をなでおろした。

夕暮のヒンドスタン平原を走る

二時間も走ったら、田園風景がえんえんとスリナガール迄続いている国選一号線をチャンディーガールへと向った。我々の乗っているトラックは荷台の回りに高さ3mも

ある囲いがついており通常は荷物を山積みしているようである。我々も羊のように囲いの中にいると、後方の視界しかないので、運転席の屋根の上で、しきりに全視界を貪った。夕暮になると農作業の帰りであろうか、水牛の引く荷車がとても多く、ふと幼い頃良く手伝った田植えを思い出させる程ののどかさであった。

夜の七時頃であろうか、チャンディガールの近くの町で夕食を取る事になったので高い荷台より飛びおり道端にずらりとならんだ露店に行こうと思ったが、助手が荷台より下りて来ないので、一緒に夕食をとろうと言ったらだめだという、なぜなら彼は荷物の番をするというのである。しかたなしに運転手二名と一緒に食卓についた、注文はマトンカレー、チャパティー、グリーンサラダであった。サラダといっても大根とキュウリ、トマトの輪切りである。我々もインドに来て始めて本場カレーとめぐり合ったらしく、かなり辛いがとてもコクがあり日本では味わう事の出来ぬ美味しい物だった。食事代を私う所迄終始運ちゃんが見守ってくれる程の思いやりがとてもうれしかった。私はすぐに助手に食事させるよう指示した。若干の果物を買込み又トラックに戻り、隊荷の箱の上で、仮眠に入った。その間トラックはチャンディガールに着いたらしく、汽笛と遠吠えを聞きながら運転手も仮眠していた。

チャンディガールを過ぎてどの位走ったであろうか、坂道にかかるあたりで道を外れて止った。ここでトラックの乗り換えをするとの事、全々人っ気がなくなつたぶん回りは畑であろうか、まぶしい程のほたるが飛んでいた。しばらくしたら幌をかけた同じトラックが来て隊荷をのせかえマナリへと向った。急勾配の悪い道を走っているらしく、トラックの後が気圧が低くなっているために、すさまじい埃が入ってきてしまうので、全員タオルをまき仮眠に耐えた。私はちょっと車が止った時にあまりの埃のひどさに閉口してしまい、運転席に転がりこんだ。荷台にいるときは運転席はさぞかし快適だろうと思っていたが、この大型トラックの運転席が以外と狭く、その上に座席が直角のためにすさまじく居心地が悪く、車がバウンドする度に上の棚に頭をぶつける始末、登り坂ではボンネット型なので足元がものすごく熱くてまいってしまった。すぐに荷台に戻り、容赦なく入ってくる砂埃りにただ耐えながら仮眠に入った。

マナリは近い

朝の五時頃であろうか、ピラスプールの手前の山道でトラックが止ってしまった。ニューデリーを出発する時には、事故がなければマナリ迄一昼夜位で首くだらうと聞いていたが、途中落石等があればそれ以上かかるとつけ加えられたとおり、やはり落石こより道路が遮断されてしまった。トラック位の落石であるため、半分あきらめの

つもりで地図を出して迂回路の話をしていたら、当の運ちゃんはまったく心配の顔を見せない。この辺の道はいつもこうらしく、さっさと茶屋に行ってしまった。我々も半分あきらめ仮眠に入った、数十分後急に落石現場あたりでワイワイ騒いでいるので、車を下りて見ていたら、車の横でトランプをしていた運ちゃんがトラックの横にこいとわめいていたので、従った瞬間”ドッカーン”と三発位のダイナマイトの爆発が聞えた。現地人が集まって落石を除外しているようであった。十一時頃開通してしまい、おどろいてしまった。

我々も気を良くして、運転席の屋根の上の箱の中に入って景色を見ながらとても快適なドライブが続いた。チャンディガールより大きな峠越えをして川底に下り、その川を上流に向かって、クル渓谷に入るわけである。ピアス川とパルバッティ川の合流点迄来ると、渓谷らしくなり、両岸にはサボテンがあり一瞬サバンナを思わせる所もあり我々の心も踊って来た。このパルバッティ川を溯ると最初我々が目指したアイスセール、ホワイトセール、ティチュ、デビボクリ氷河があると思うと白銀の峰々が頭にうかび、そして日本でいろいろ調べた事がとてもなつかしく思えた。そのパルバッティ川を渡り、いよいよピアス川を溯る事になった。クル渓谷はとても広く、明るくスイスを思わせる位美しい。道路一杯になって群をなしている羊にはトラックも勝てず、いちいち止っているようである。そしてクルを過ぎ一段と縁の濃くなったマナリへと向った。もうこの頃は夕方になりポツリポツリと雨が降り出して来た。クルから一時間半位で、一見猥雑な感じのする針葉樹に囲まれたマナリに着いた。

しかし猥雑という言葉はあてはまらず、インド人とチベット人の接するとても民族豊かなにぎやかな町のマナリと感じる迄数分とかからなかった。

